

連歌懷紙二種 松平文庫本 「文明八年五月賦何木連歌」と河野信一記念文化館本 「疊字連歌」について

岩 下 紀 之

ここに紹介しようとする二種は、いずれもそれぞれの所蔵者によって整理され、目録に記載されていて、その意味においては完全な新資料というべきものではない。しかし、勿論翻刻されたことにはないと思われるから、ここに紙面を借りてみたい。

まず、松平文庫本の百韻であるが、雲形模様の懷紙八枚を継いだ卷子本で、連歌賦詠のもともとの形式である四枚懷紙を各表裏を切断して卷子本に仕立てたものと思われる。それで各句は二行書きされ、各用紙について見ると一の表にあたる部分八句、以下十四句ずつ、名残の裏八句というようになっていて、残念なことに虫損によって保存状態は非常に悪く、無疵な句がまれないほどである。それで張行の日付も「文明八年五月」とまでは見えるが何日かはわからない。ちょうど、応仁の乱の末期にあっている。

作者については一切署名がない。天皇が和歌を懷紙に書くときは、名を書かない。それに準じて、この百韻は後土御門天皇御製の独吟と推定されるのである。点者の「一条殿」は当然一条兼良であろう。時に七十五歳。この時点でなお、奈良に滞在している。一方、同年五月廿三日、宗祇の編した「竹林抄」に序文を与えている。本百韻と

はまさしく同月であり、この時宗祇は南都に下って、一条兼良に面会しているのだが、この御製一卷をもたずさえていったと見るのは想像がすぎるであろうか。翌文明九年七月廿九日の「大乘院寺社雜事記」には、

宗祇下向、室町殿、同御台、禁裏御会御合点判詞御申之間、為御使參成就院云々、大乱中希有事也

とあって、翌年になれば禁裏の作品を兼良のもとへ持参しているのには明証がある。

これも同じ文明九年のことであるが、六月三日の「史料綜覧」を引用してみる。

一条兼良ノ独吟連歌ヲ觀覽セラレ、御製ヲ附シテ広橋兼頭ニ返還シ給フ。

これによれば、天皇と兼良とのあいだで、独吟百韻を見せあっていたことにならうか。この年十二月十七日、一条兼良は帰京した。

後土御門天皇は「新撰菟玖波集」に百七句入集していることから明らかなように、公家連歌壇の中心として活躍し、他にも百韻懷紙類の伝来しているものがある。

次に、疊字連歌は室町期に流行しているが、俳諧連歌の源流の一つとして注目される。毎句に必ず漢語を詠み込むという性質上、和歌的な発想に徹底的に制約される連歌に対し、それとは異なった発想が可能となるからである。ここに紹介する百韻は、発句から第三までが切り取られていて、張行年時が不明であるが、以下あらあら考証してみる。

本書は卷子本であるが、連歌としての書式を生かそうとした写本ではない。各句とも一行に書かれているが、元来の懷紙の書式ではこれを二行に書くべきものだからである。また、用紙の継ぎ目にかけても句が書かれていて、この写本は卷子本に製本されたところに字を書いていることになり、先に紹介した松平文庫本とは逆の成り立ちである。それから各句の作者名も省かれているが、句上げから、出座した人々が五人だったことがわかる。

本書が納められている箱の底に、「三井寺竜花院伝誉上人伝内の子と申事」という貼紙があり、蓋にも内側に直接「建部伝内不傳なる月は戊申八枚巻一巻」と記入されている。「古筆名葉集」附属の「古筆鑑定家印譜」には「大倉好齋」なる人物が見られ、その印と、本極め書の印とはよく似ている。小松茂美氏「古筆」の古筆家系図によると、九代了意の弟子に「大倉汲水」その弟子に「好齋」があり、十代了伴の弟子に「大倉好齋」がある。この三通りの「好齋」は同一人であろうか。いずれにせよ幕末近くの人物であることには間違いないから、ここにいう戊申春は嘉永二年の可能性が強い。

次に「建部伝内」であるが、「寛政重修諸家譜」によれば、「建部賢文」なる人物であって、はじめ近江の佐々木承偵に仕え、主家没落後浪人し、後豊臣秀吉に仕え、天正十八年、六十九歳で没している。「古筆名葉集」筆道流儀分には「伝内流建部」とあるので、安土桃山時代ではそれなりに評価された書き手なのであろう。「伝誉上人」については、「寛政諸家譜」には見えず、不明とするよりない。

以下この百韻の張行年代を推定してみたい。句上げの一字名は五名とも不明で、この面からの推定は困難である。そこで賦された内容から考えてみる。

丑 公家武家ともに和睦成けり

子 將軍の准后の宣を蒙りて

酉 相国寺こそ五山にはいれ

この三句いずれも歴史的な大事件を詠んでいて、疊字連歌の自由さを見るべきものがある。公家武家和睦というのは何であろうか。「武家の和睦」にふさわしい史実は、およそ戦乱の絶え間のなかつた室町時代を通じて見られた

凡 例

- 一、漢字・仮名ともに現在の通行文字を用いた。
- 一、後土御門天皇独吟について、各句は二行書なので、行のかわりめに「」をつける。また用紙のかわりめに「は」をつける。判読できなかった箇所は、字数が分るかぎりは一字を□とし、不明の場合□の
ようにする。
- 一、兩種とも句に通し番号を付した。
- 一、印刷所の格別の御配慮により、原本との対照が可能となったことを付記する。
- 一、松平文庫、河野信一記念文化館には貴重な資料の翻刻を許可されたことを感謝する。

連歌懐紙二種について



五一

連歌懐紙二種について

一 松平文庫本「賦何木連歌」

文明八年五月

一条殿之御点

賦何木連歌

一 一こゑは世に類「なしほと、きす

二 ゆくあとにほふ「風のたち花

三 降しくもかけ淺 「ちの朝月よ

四 かりね 「いつ 「山のした庵

五 袖さむく柴引「むすふ戸をあけて

六 「つむ沢の」水のうすらひ

七 「野への」 「のあ 「や

八 はるのい 「にや」かすみたつらん」

五二

二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九



連歌懐紙二種について

九 暁はさやかに「みえぬ天津鴈^(カ)

一〇 あきかせふけは「夢そおとろく

一一 なき人は去年の「こよひの月のもと

一二 おもかけのみか^(カ)「聞しことの葉

一三 きえねた、命「あらはのうきおもひ

一四 住世もつらし「なみたいつ□て

一五 しつくふる雪の「しの屋に身を侘^(カ)て

一六 たひゆく人の「こゝろをもしる

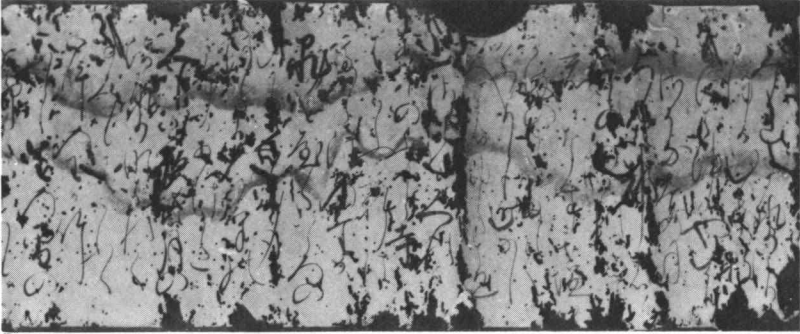
一七 わすれすと□「□き□る□

一八 みれはかせより「かほるむめか枝

一九 なには津やむかし「もさそな春の月

二〇 うつ□都の「□の□れさ

二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二〇 一九 一八



- 二二 君かなす其塩」かまのうらたえて
- 二二 けふりもむなし」人のゆくすゑ』
- 二三 山カさとのかへれ」あらしのふもと寺
- 二四 はこふ薪は」た、法のため
- 二五 罪をやくこゝろの」いかりくカ身カ
- 二六 ほたるのかげの」きゆるあけかた
- 二七 みしか夜の月の」河かせ吹はれて
- 二八 なみにかたふく」岸のわか竹

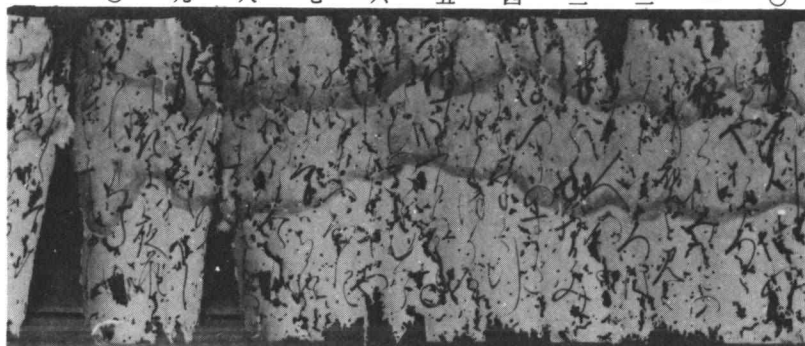
四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九



連歌懐紙二種について

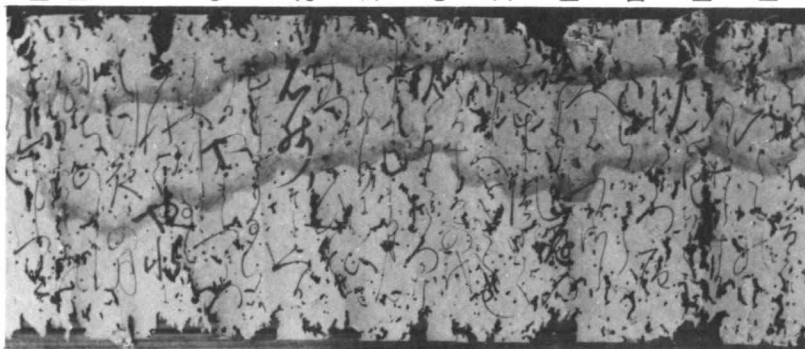
- 二九 ことし生の雪の」を柳□□かりに
- 三〇 みとりのかみも」のちしろくなる
- 三一 うつし絵にまつ空」いろをかき初て
- 三二 はてなきおもひ」筆もおよはず
- 三三 つかのまもかはかぬ」そてに身はふりてぬ
- 三四 人めものへは」おなし世もうし
- 三五 隠家に契□□山をまたこえて
- 三六 かれは鹿子の」野をはのかれす」
- 三七 折しきてみちに」あとあるを篠原
- 三八 たひたつたれか」雪に行らむ
- 三九 こゑそする月の」淀の、くたり舟

四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一



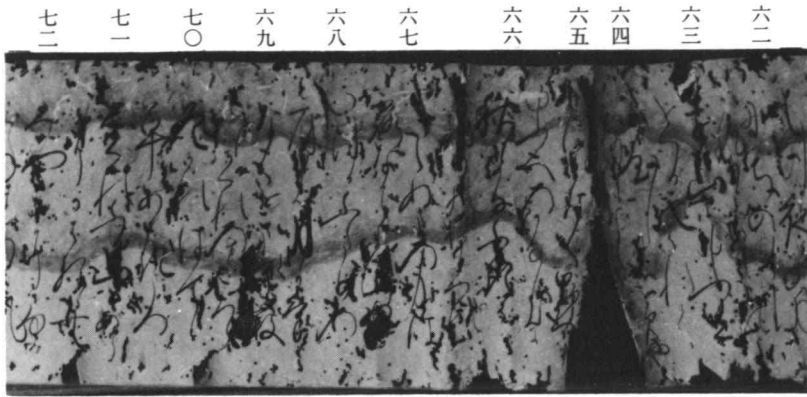
- 四〇 秋の川すの「鳥やおとろく
- 四一 霧かくれみさこの「はふり鷹と見て
- 四二 にももこ、ろは「かはる人の子
- 四三 伴て手習文「字のそのすかた
- 四四 かきわけて行「を野、ほそ道
- 四五 さとふりぬかきね「つたひの八重むくら
- 四六 さしこもりてや「物おもふやと
- 四七 おもかけはちかき「わかれのなみたにて
- 四八 あたのちきりの「しの、めの
- 四九 身をしれはをし「まし花よさ夜嵐
- 五〇 ちれはさくら 「塵とこそなれ」
- 五一 陰ふかく春の「山ちを分暮て

五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三



連歌懐紙二種について

- 五二 谷のかたえの「おの、おとする」
五三 戸をとちて主は「いかにひとつ庵」
五四 あさちかはらは「人のふるさと」
五五 跡もなき庭の「芝生に風吹て」
五六 をしへをきくも「かはるすゑの代」
五七 親よりもおろかなる「身にむまるらん」
五八 すもりにかひこ「すつるうくひす」
五九 名残そと人かは「花にともなひて」
六〇 ちるやまふきの「うかふ川なみ」
六一 なかれてや水に「春行夜はの月」
六二 舟ちのとかに「かせもおとせす」



七二 七二 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二

- 六三 遠山にゆふ立」をくる雲はれて
- 六四 はやしはのせみや」露になくらん」
- 六五 なにとなく野へは」ゆふへのかなしきに
- 六六 秋となふきそ」かせのおとつれ
- 六七 きえぬまの身は」露なからまつ物を
- 六八 いつかふたりの」床の月かけ
- 六九 なくをきけ藪」ふしかくれのかたうつら
- 七〇 冬かれはて、」草あさきころ
- 七一 しくれふる山もあら」はにかはるらむ
- 七二 みやこにさゆる」みねのあさ風

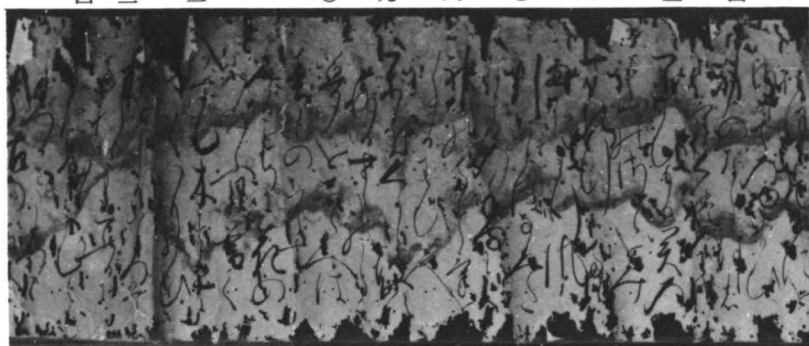
七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四



連歌懐紙二種について

- 七三 のほる日のかすみ」もやらす春はきて
七四 としあらたむと」身をいはふなり
七五 名にめて、谷水」むすふ老のそて
七六 □絶(カ)にそ手折(カ)」あかの一えた
七七 方分てにし紅の」むらもみち
七八 いつかひかしは」霧しろき山」
七九 明はつる月は雲」にやうつるらむ
八〇 めにみぬ色の」□きはあきかせ
八一 むは玉の夜を」いそきぬる衣、に
八二 まよふこ、ろは」夢かうつ、か
八三 おもほえずな(カ)にを」さしての物おもひ

八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四



- 八四 身のならばしの「あけくれのわさ
八五 かよひもる関の」と山のさと、をみ
八六 すき行はた、雨とまつ風
八七 引ことはなみた「なからの手向にて
八八 神のたすけを」祈るわひ人
八九 かきくらし波あれ「まさるすまのうら
九〇 夢をしたへは」春ものこらす
九一 みるうちに花の「うつろふ日は暮て
九二 かすむ木すゑに」ひ、くいりあひ」
九三 秋をしるこ、ろは「たれもうれふるに
九四 はたや、さむき」しつかさころも

九五

九六

九七

九八

九九

一〇〇



連歌懐紙二種について

九五 うら枯の野への」栖のひとへかき

九六 くすはふ軒も」ひまあらはなり

九七 吹分て風と月」もる夜の雲

九八 はれみはれすみ」すくるむら雨

九九 あしはや□塩さす」舟のとまふきて

一〇〇 御代の御調そ」かすをみちたる

付墨十三□

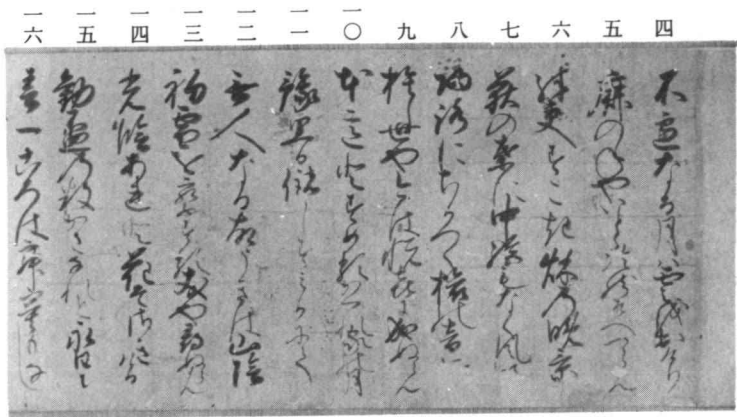
付記

○ 付点の数は本文では十四箇所に見え、末尾の記載と一致しない。

○ 六四から六五の接続にや、疑問がある。六四と六七に「露」があり、六二と六六に「かせ」があるからである。本来は、五一から六四までは名残面として九三につながっていたのではないか。こう移動させてみると五〇と六五、九二と六五が接続することになるが、矛盾は生じないだろうか。しばらく私案を提示しておく。

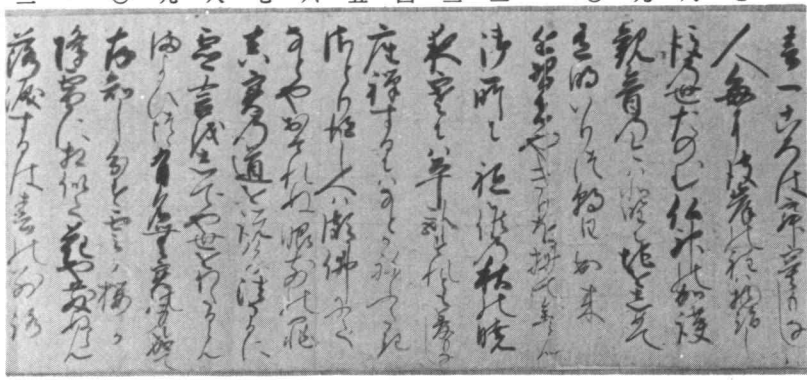
○ 次の「量字連歌」とともに、読みの疑問箇所には(カ)と付記しておいた。

二 河野信一記念館本「疊字連歌」



- 一 (欠) 二 (欠) 三 (欠)
- 四 不慮なる月は雲を出けり
- 五 鹿のねやいと、冷然そへつらん
- 六 殊更すこき焔の晩景
- 七 萩の葉に中絶もなく風
- 八 帰路にちかつく旅の音
- 九 捨し世や今は悦喜に成ぬらん
- 一〇 本意とすめるかくれ家の月
- 一一 豫思ひ儲しすみかにて
- 一二 無人なる故うきは山陰
- 一三 初雪を察する友や尋ぬらん
- 一四 光臨あれと花そさきける
- 一五 勸盃の数かさなれと永日に
- 一六 春一ころは寂毫(か)もなし

一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三

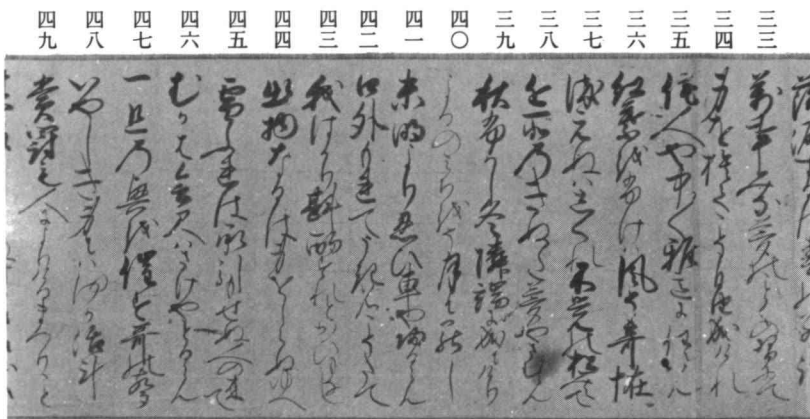


- 一七 人毎に彼岸の程は物詣し
- 一八 後の世たのむ仏神の加護
- 一九 観音の今は北野に地をしめて
- 二〇 有明いりつ朝日出来
- 二一 近習者やきりを払て参らん
- 二二 御所に祖候の秋の暁
- 二三 夜寒には平臥すれとも夢もなし
- 二四 座禪するにはなとかねふたき
- 二五 さとり得し人は頗仏にて
- 二六 などやおそれぬ眼前の罪
- 二七 真実の道を説ける法なるに
- 二八 零言をしてや世をわたるらん
- 二九 まよひつ、有名無実の身に成て
- 三〇 存知し分す雲か桜か
- 三一 降雪に相似て花や散ぬらん
- 三二 落涙するは春の別路

連歌懐紙二種について

六三

連歌懐紙二種について



- 三三 万事みな夢のことくの習にて
- 三四 身を捨てこそ自由成けれ
- 三五 佗人や中く雅意に任らん
- 三六 紅葉をふけは風そ奇恠
- 三七 染えぬはしくれ不覚の松みえて
- 三八 近所のきぬた夢やさむらん
- 三九 秋ふかし冬隣端に成にけり
- 四〇 よるのみちをそ月に罷し
- 四一 未明より忍ひ車や帰るらん
- 四二 口外もれてうきなこそたて
- 四三 我はかり斟酌すれとかひもなし
- 四四 出物なるは身をしらぬゆへ
- 四五 雪ふれは承引もせぬ人の来て
- 四六 むかは会尺はさけやとるらん
- 四七 一旦の興を催す哥の声
- 四八 いやしき身とは何か活計
- 四九 賞爵も人によりけるまつりこと

五〇 謀叛おこさぬ時は此御代
 五一 いまの国静謐すれば住能て
 五二 公家武家ともに和睦成けり
 五三 將軍の准後の宣を蒙りて
 五四 相国寺こそ五山にはいれ
 五五 此ころは禅僧のみな満足し
 五六 自余の法師はいか、あるらん
 五七 名そたかき南都北嶺相共に
 五八 諸宗をしるそ学匠といふ
 五九 をしへみな一切智恵そ穴賢
 六〇 委細なりけり法の巻物
 六一 深更にをよふ里には月入て
 六二 別の以後ものこる秋の夜
 六三 最前にいかなる鳥の鳴つらん
 六四 とはる、時そ快然になる
 六五 逢みれはもとの遺恨も忘れられて

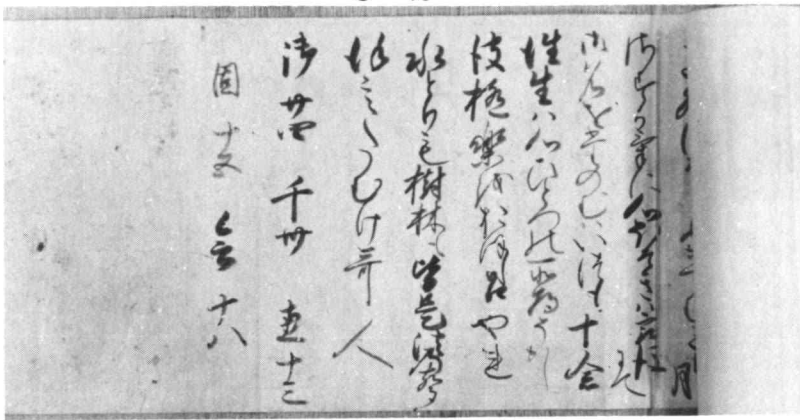
連歌懷紙二種について

六五

八三 したしきも心の似ねは疎遠にて
 八四 兄弟のなと不会成らん
 八五 梅と菊時分相違の花盛
 八六 両度のわかれおしき春秋
 八七 鴈かねや都鄙の名残をしたふらん
 八八 日数かさなる旅の積鬱
 八九 なれし友音信なきは不審にて
 九〇 こぬ夜は若や他行なるらん
 九一 花の比風到来はうき物を
 九二 ちるさくらこそ楚忽成けれ
 九三 ゆく春を抑留せぬは悲しきに
 九四 慮外になりぬかすむ三日月
 九五 さすかけに心ほそきは最後にて
 九六 御名をたのむはいつも十念
 九七 往生は心ひとつの所為そかし
 九八 彼極樂をおほし召やれ

連歌懐紙二種についで

一〇〇 九九



九九 水とりも樹林も皆是法の声
一〇〇 謹言たむけ哥人

水とりも樹林も皆是法の声
 此もいふは哥人
 沙也 千也 惠十三
 固十五 会十八

御廿四 千卅 惠十三
 固十五 会十八